第三講　指示内容

一

問1　次の文章を読んで、傍線部の本文中の意味として最も適切なものを後の中から選べ。

*後堀河院御位の時、嘉禄二年九月十一日、*例幣に頭の中将宣経（のぶつね）朝臣以下、*職事（しきじ）ども参りて*出御（しゅつぎょ）待つほど、人々、*鬼の間に集まりゐて、何となき物語しけるに、*台盤所には*内侍ども、さらぬ女房たちも候ひけり。*渡殿には、*貫首（くわんじゅ）に従ひたる蔵人ども並びゐて、内も外もなく、さまざまの物語いひ交はすに、…

＊後堀河院…鎌倉時代の第八十六代天皇。
＊職事…蔵人の総称。
＊鬼の間…清涼殿の西廂（ひさし）の南端にある部屋。
＊内侍ども…内侍所に務めている女房たち。
＊貫首…蔵人の頭の別称で、ここでは宣経のこと。
＊例幣…毎年九月十一日に朝廷から伊勢神宮に幣を奉納すること。
＊出御…天皇のお出まし。
＊台盤所…清涼殿の一室で、女房たちの詰所。
＊渡殿…寝殿造りで、建物と建物とをつなぐ屋根のある廊下。

ア　いつもと違う　　イ　重要でない　　ウ　退出しない
エ　内侍ではない　　オ　物語をしない

問２　次の文章を読んで、後の問に答えよ。

歌川はもと越前の国三国（みくに）の花街（くるわ）、荒町屋某がもとの遊女、泊瀬川（はせがは）と云ふ。容色ありて、心ばへうるはしく、香、茶、花、手跡ともに志すといへども、最も性、俳諧を好めり。後、薙髪（かみおろ）して歌川（かせん）といふ。いまださかりなりし時、東都某の士夫、三国に来りてことに睦びけり。其時、泊瀬川いふ、「妾（せふ）、吾妻を一見せむと願ふこと久し、もし時をえて遊びなば、君が*第にとどめ給はんや」といふに、こころよくうけひきぬ。其後、東国の人とだに聞けば、必ずこのことを約し置けり。

＊第＝屋敷。

問　傍線部「このことを約し置けり」とはどういう意味か。最適なものを次の中から選べ。

ア　もし東国へ帰るのであれば、自分を妻にして欲しいと頼んだ。
イ　もし東国へ行くことがあれば、物見遊山に連れて行ってほしいと頼んだ。
ウ　もし自分が東国へ行くことがあれば、家に泊めて欲しいと頼んだ。
エ　もし自分が東国へ行くことがあれば、俳諧の指導をして欲しいと頼んだ。
オ　もし東国へ帰るのであれば、機会があれば、連絡をして欲しいと頼んだ。

問３　次の文章を読んで、後の問に答えよ。

ある時、主人の前に出て、「こたび君の御蔭にて、かたがた残りなくみめぐり、としごろの本意もとげ、かつ、おもひもかけぬ御あたりの御恵を蒙りぬ。国にて約せし日数も、今はみちなんとすれば、いとま給ひなん」といふに、あるじ「そのこと」はすこしも心にかくべからず。別に人をもて国人にいはせぬ」とて、せちにとどめ給へば、…

問　傍線部「そのこと」とはどういうことか。最適なものを次の中から選べ。

ア　宿の主人と長逗留の間に打ち解けて、別れるのがつらいということ
イ　宿の主人に、長逗留の間、思いがけない歓待を受けたこと
ウ　宿の主人のおかげで、東国で行きたい場所を残りなく巡れたこと
エ　宿の主人とともに、俳諧修行の念願を果たしたこと
オ　宿の主人にすっかり世話になった上、国の亭の主と約束した期日が迫ったこと

問４　次の文章を読んで、傍線部「かかる事」の内容として最も適切なものを後の中から選べ。

東宮におはしましける時、世のへだて多くおはしましければ、危(あや)ふく思(おも)ほしめしけるに、検非違使(けびゐし)の別当にて経成(つねなり)といひし人、直衣(なほし)に柏夾(かしはばさみ)して、白羽(しらは)の胡簶(やなぐひ)負ひて参りて、中門(ちゆうもん)の廊にゐたりける日は、いかなる事の出で来ぬるぞ、と宮の中、女房よりはじめて、隠れ騒ぎけるとかや。おはします所、二条東洞院なりければ、そのわたりを軍(いくさ)のうち廻(めぐ)りて包みたりければ、「かかる事こそ侍れ」など申し合へりけるほどに、別当の参りたりければ、東宮も御直衣たてまつりなどして、御用意ありけるに、別当の、検非違使召して、「犯しの者は召し捕(と)りたりや」と問はれければ、「既に召して侍り」といひければこそ、ともかくも申さでまかり出でられにけれ。

世のへだて……妨げとなるもの。具体的には、東宮に敵対する勢力のこと。　検非違使の別当……検非違使庁の長官。
経成といひし人……源経成。一〇五〇年から一〇六四年まで検非違使の別当。
柏夾……冠の後方に垂らす纓(えい)を、非常時に折りたたんで留めるための道具。　軍……矢を射る人たち。軍勢。
検非違使召して……ここでは、検非違使庁の一役人を呼びつけて、の意。

ア　検非違使の別当が中門の廊にやって来ていること。
イ　検非違使の役人が東宮の御所を包囲していること。
ウ　敵対する勢力が東宮の御所を攻めてきていること。
エ　女房らが恐がって隠れたり騒いだりしていること。
オ　犯人を追う役人たちがその行方を探っていること。

問5　次の文章は、九条殿藤原師輔について述べたものである。傍線部「さらざらましかば」とあるが、具体的にはどのようなことをいうのか、後の中から最も適切なものを一つ選べ。　※本文一部中略

いにしへより今にかぎりもなくおはします殿の、ただ冷泉院の御ありさまのみぞ、いと心憂く口惜しきことにてはおはしますといへば、侍、されど、ことの例には、まづその御時をこそは引かるめれといへば、それは、いかでかはさらでは侍らん。そのみかどのいでおはしましたればこそ、この藤氏の殿ばら、今に栄えおはしませ。さらざらましかば、このごろわづかにわれらも所々の御前、雑役につられ歩きなましとこそ、入道殿は仰せられければ、…

（大鏡）

冷泉院…冷泉天皇。第六三代天皇。九五〇〜一〇一一。在位は九六七〜九六九。母は師輔女安子。
入道殿…藤原道長。九六六〜一〇二八。父は師輔男兼家。

ア　もしも九条殿がいらっしゃらなかったら。
イ　もしも冷泉天皇の事例を引かなかったら。
ウ　もしも冷泉天皇が即位なさらなかったら。
エ　もしも摂関家が栄えることがなかったら。

二

問1　左の文章は、『住吉物語』の一節で、中納言が亡き妻との間の娘である対（たい）の君を入内（じゅだい）させることについて、北の方（継母）に相談するところから始まる。これを読んで、傍線部の内容として最も適当なものを後の中から選べ。

かくしつつ明かし暮らすほどに、九月にもなりぬ。中納言、北の方にのたまふやう、「行く末は知らず、（注1）二人の女（むすめ）はありつきぬ。この対の君を、今年の（注2）五節（ごせち）に内裏（うち）へ参らせばやと思ふなり。同じ御心ならぬ、心憂さよ」とのたまへば、継母、わが子たちに思ひまし給へるを、ねたしと思ひながら申すやう、「なかなかおぼえ少なき宮仕へよりも、時めく（注3）上達部（かんだちめ）などにあはせ給へかし」とのたまへば、中納言、「なみなみならむ人には、見せむ事はあらじとて」などのたまへば、〈中略〉継母ともに営む気色（けしき）にて、下には、「いかにしてあやしき名を立てて、思ひ疎ませむ」とおぼしけり。

中納言、霜月のことなれば、<u>このこと</u>のみ急がるるに、わが子どもにはまさりてあらむことをそねみ、「（注4）人笑はれ草になさむ」と思ひ、…

1　二人の女…北の方（継母）が生んだ二人の娘たちのこと。
2　五節…陰暦十一月、新嘗祭（にいなめさい）・大嘗祭（だいじょうさい）の時に朝廷で行われた、五節の舞を中心とした行事。
3　上達部…公卿の異称。大臣・大納言・中納言・参議および三位以上の者をいう。
4　人笑はれ草…笑われ者のこと。

ア　対の君を入内させること　　イ　北の方を納得させること
ウ　北の方の真意を探ること　　エ　対の君の不満を解消すること
オ　対の君の意志を確認すること

問２　次の文章を読んで、傍線部の解釈として最も適当なものを、後の中から選べ。

昔、(注1)空也(こうや)上人、(注2)山の中におはしけるが、常には、「あなもの騒がしや」とのたまひければ、あまたありける弟子たちも、慎みてぞ侍りける。度々(たびたび)かくありて、ある時、かき消(け)つやうに失せ給ひにけり。心の及ぶほど尋ねけれども、さらにえ会ふこともなくて、月ごろになりぬ。さてしもあるべきならねば、みな思ひ思ひに散りにけり。

１　空也…平安時代の僧。浄土教の先駆者。
２　山…比叡山延暦寺。

ア　空也上人を探し続けてもいられないので
イ　空也上人に頼ってばかりではよくないので
ウ　空也上人が戻って来るとは期待できないので
エ　空也上人は生きていないのかもしれないので
オ　空也上人とどこかで会わないとも限らないので

問３　次の文章は、宮仕えに出ている作者が、同僚の女房とともにいるところに、ある殿上人（男性）が訪問してきたところである。これを読み、後の問いに答えよ。

上達部、殿上人などに対面する人は、定まりたるやうなれば、*うひうひしき里人は、ありなしをだに知らるべきにもあらぬに、十月ついたちごろのいと暗き夜、*不断経に、声よき人々読むほどなりとて、そなた近き戸口に二人ばかりたち出でて聞きつつ、物語して寄り臥してあるに、参りたる人[A]のあるを、「逃げ入りて、局なる人々呼び上げなどせむも見苦し。さはれ、ただ折からこそ。かくてただ」と言ふ*いま一人のあれば、かたはらにて聞きゐたるに、おとなしく静やかなるけはひにても のなど言ふ、くちをしからざなり。「いま一人は[B]」など問ひて、世のつねのうちつけのけさうびてなども言ひなさず、世の中のあはれなることどもなどこまやかに言ひ出でて、さすがにきびしう引き入りがたきふしぶしありて、われも人も答へなどするを、…

*うひうひしき里人…作者のこと。
*不断経…昼夜絶えず僧たちに経を読ませる仏事。
*いま一人…同僚の女房。

問　傍線部Ａ「参りたる人」、傍線部Ｂ「いま一人」が指し示す人物は、それぞれ誰か。次の中から選べ。

ア　作者　　イ　同僚の女房　　ウ　客人に対面する役の女房
エ　殿上人　　オ　読経をする人

Ａ＝　　　　Ｂ＝

問4　次の文章は『西行物語』の一節である。これを読んで、傍線部「そなた」が何を指すか、答えよ。

かくて、山々寺々を伝ひゆくほどに、四月のはじめばかりに美濃の国まで上りたりけるに、さすが捨てしながらも、都のことどももゆかしくおぼえて、「そなたの便りがな」とうちあらます折節、ほととぎす、一声二声おとづれて過ぎければ、

　ほととぎす都へゆかば言伝てむ越え遅れたる旅のあはれを

問5　次の文章は松尾芭蕉の『笈の小文』の一節である。傍線部「この」が示すものは何か。文中より漢字二字を抜き出せ。

百骸九竅（ひやくがいきうけう）の中に物あり。仮に名付けて風羅坊（ふうらばう）といふ。まことに羅（うすもの）の風に破れ易からんことをいふにやあらん。彼、狂句を好むこと久し。終（つひ）に生涯のはかりごととなす。ある時は倦（う）んで放擲（はうてき）せんことを思ひ、ある時は進んで人に勝たんことを誇り、是非胸中に闘（たたか）うて、これがために身安からず。しばらく身を立てんことを願へども、これがために障（さ）へられ、しばらく学んで愚をさとらんことを思へども、これがために破られ、終に無能無芸にしてただこの一筋に繋（つな）がる。

百骸九竅……『荘子』による。人体を構成する多くの骨と九つの穴、転じて人間のこと。

風羅坊……芭蕉の葉が風にもろいことに通じる芭蕉自身の別号。

三

問1　次の文章は、寿永二（一一八三）年、源氏に攻められた平家が都落ちをする場面である。これを読んで、傍線部の指示内容がわかるように、口語訳しなさい。

（前内大臣の平宗盛が）「さて三位の中将はいかに」と問ひたまへば、「小松殿の君達はいまだ一所も見えさせたまはず」と申す。「さこそあらめ」とて、いよいよ心細げに思はれけり。

※三位の中将…平維盛。平重盛の子。
※小松殿…平重盛。宗盛の亡くなった兄。

問２　次の文章を読んで、傍線部「さ言ふばかりの社とも見えず」を、指示語「さ」の指す内容を明らかにして現代語訳せよ。

さて、川辺に沿ひつつ少し西に行きて、丹治(たんぢ)といふ所より吉野の山口にかかる。やや深く入りもて行きて、杉むらの中に、四手掛(しでかけ)の明神と申すがおはするは、「吉野山口神社」などにはあらぬにや。されど、さ言ふばかりの社とも見えず。

丹治……吉野にある地名。
四手掛の明神……吉野山の入口あたりにある神社。幣掛神社とも。
吉野山口神社……平安時代の『延喜式』に載る吉野の古い神社。

問３　次の文章を読んで、傍線部を口語訳せよ。

五条わたりに、いと貧しくて住みける女男ありけり。をのこあくまで酒を好みけれど、求むべきやうもあらざりしかば、妻いとわりなしと思ひて、おのが髪半(なか)らばかりを切りて市(いち)に持ち行き、酒にかへて男にすすめぬ。男おどろき、いかにして求め給へるにかと問ふに、しかじかなんしつると語りければ、男さめざめとうち泣き、…

問４　次の文章は、作者（安嘉門院四条）が恋に破れて出家を決意し、主人の邸（やしき）から出奔する場面である。これを読んで、傍線部について、主語・指示語の内容を明らかにして現代語訳せよ。

ただ今も出でぬべき心地して、やをら端を開けたれば、〈中略〉人にや見つけられむとそら恐ろしければ、もとのやうに入りてふしぬれど、傍らなる人うちみじろきだにせず。さきざきも宿直人の夜深く門を開けて出づるならひなりければ、<u>その程を人知れず待つに、</u>今宵しもとく開けて出でぬる音すれば。

注　端…部屋の隅の戸。
　　傍らなる人…同僚の女房。
　　宿直人…警固の役人。

問５　次の文章を読んで、傍線部Ａ・Ｂが指すものをわかりやすく説明せよ。

比(ころ)は二月十日の曙なれば、余寒、猶尽(なをつき)せず、音羽(おとわ)川の流(ながれ)も氷(こほり)つつ、嶺(みね)の嵐(あらし)もいとはげし。道のつららもとけぬが上に、又かきくもり雪ふれば、行(ゆく)べき方(かた)もみえざりけり。子共、しばしは母にすすめられてあゆめ共、後には足(あし)はれ血出(いで)て、或時(あるとき)はたふれ臥(ふし)、或時は雪のうへに居(ゐ)て、「さむやつめたや、[A]こはいかがせん」と泣悲(なきかなし)む。母ひとり、[B]これを見けん心の中(うち)、いふはかりなし。

Ａ＝

Ｂ＝

【第三講】

〔模範解答〕

一

問１　エ　　問２　ウ　　問３　オ　　問４　イ　　問５　ウ

二

問１　ア　　問２　ア　　問３　Ａ　エ　　Ｂ　ア

問４　都　　問５　狂句

三

問１　平重盛の子供たちが誰一人姿を見せないのは当然だろう

問２　『延喜式』に載る吉野山口神社というほど由緒ある神社にも見えない

問３　自分の髪の毛を切って市場に持って行き、酒と交換した

問４　警固の役人が門を開けて出ていくときを私がひそかに待っていると

問５　Ａ　雪の上にいて、寒くて冷たいこと

Ｂ　子供が足を怪我して、倒れ伏して泣きながら訴える姿

〈現代語訳〉

一

問１　後堀川院が天皇の位にいらっしゃった時、嘉禄二年九月十一日、毎年この日に朝廷から伊勢神宮に幣を奉納する例幣として頭中将宣経朝臣以下、蔵人たちが参上して天皇のお出ましを待っている時、人々が、清涼殿の西廂の南端にある部屋に集まって座って、何ということもなく雑談をしていた時に、女房たちの詰所の台盤所には内侍所に務めている女房たちや、そうではない〔＝内侍ではない〕女房たちもお控えしていた。建物をつなぐ廊下には、宣経に従っている蔵人たちが並んで座っていて、（簾の）内も外も関係なく、いろいろな雑談を言い交わしていると…

問２　歌川はもともと越前の国三国の遊郭、荒町屋の某のもとの遊女で、（遊女名を）泊瀬川という。容貌がよく、気立ても素晴らしく、お香、お茶、お花、習字をひと通り嗜んだが、最も生来、俳諧を好んだ。後に、出家して歌川と名乗る。まだ（遊女として）栄えていた時、江戸の某の士夫が、三国に来て特に懇意になった。その時、泊瀬川が言うには、「私は、東国を一度みたいと長く願い、もし機会があり遊山することになったら、あなたの屋敷に泊めてくださるだろうか」と言うと、快く承諾した。その後、東国の人とさえ聞けば、必ずこのこと〔＝もし自分が東国へ行くことがあれば、家に泊めて欲しいということ〕を約束しておいた。

問３　ある時、主人の前に出て、「このたびはご主人さまのおかげで、あちこち残ることなく見物し、長年の願いも叶え、さらに、思いもよらないお人からもお恵みを頂戴しました。国で約束した日数も、今は迫っているので、お暇をお与えください」と言うと、主人が「そのことは少しも心にかけなくてよい。別に人を使って国の人に（いろいろと）言わせない（ようにしよう）」と言って、一心に留めなさるので、…

問４　（後三条天皇が）皇太子でいらっしゃった時、皇太子に敵対する勢力が多くいらっしゃったので、（東宮の位にあり続けることを）危うくお思いになっていたところ、検非違使庁の長官の源経成といった人が、直衣に柏ばさみの格好で、白羽の胡簶を背負って参上して、中門の廊下に座っていた日は、どのようなことが起こったのか、と宮中の中が、女房たちをはじめとして、身を隠して大騒ぎしたとかいうことだ。（東宮が）いらっしゃる所は、二条東洞院であったので、そのあたりを軍勢が包囲したので、「このような〔＝検非違使の役人が東宮の御所を包囲している〕ことがございます」など申

し上げあっていた時に、長官が参上したので、東宮も御直衣をお召しなどして、御用意なさったときに、長官が、検非違使庁の一役人を呼びつけて、「犯人は召し取ったか」と尋ねなさったところ、「既に召し取りました」と言ったので、あれこれを申し上げずに退出なさった。

問５　「昔から今に至るまで素晴らしくいらっしゃる殿〔＝九条殿藤原師輔〕が、ただ（師輔の孫である）冷泉院の（気の病の）ご様子だけが、たいそう情けなく残念なことでいらっしゃる」と（大宅世継が）言うので、侍が、「しかし、何かの例としては、まずその冷泉院の御代を引かれるようだ」と言うと、（世継は）「それは、どうしてそうならないことがありましょう。その帝〔＝冷泉院〕が即位なさったから、この藤原氏の一門が、今に栄えていらっしゃる。『そうでなかったら〔＝冷泉天皇が即位なさらなかったら〕、このごろやっとのことで自分たちもあちらこちらの御前駆、雑役として連れられ歩いていただろう』と、藤原道長がおっしゃったので、…

二

問１　このように明かし暮らしている間に、九月になった。中納言が、北の方におっしゃることには、「将来はわからないが、二人の娘は結婚した。この対の君を、今年の五節に宮中へ参内させたいと思うのだ。（あなたが私と）同じお気持ちでないことが、つらいことよ」とおっしゃるので、継母が、我が子たちに（対するよりも、中納言が対の君に対して）思いが強くいらっしゃるのを、腹立たしいと思いながら申し上げるには、「かえって寵愛が少ない宮仕えよりも、時勢に乗っている上達部などと結婚させなさいませよ」とおっしゃると、中納言が、「平凡な人には、結婚させることはすまいと思って」などとおっしゃるので、〈中略〉継母は一緒に準備をする様子で、内心では、「なんとかして見苦しい評判を立てて、愛想を尽かさせよう」と思いなさった。

中納言が、十一月のことなので、このこと〔＝対の君の入内〕だけを準備なさるので、我が子にもまさっているようなことを（北の方は）ねたみ、「（対の君を）笑われ者にしよう」と思い、…

問２　昔、空也上人が、比叡山延暦寺にいらっしゃったが、いつも、「ああ騒がしいなあ」とおっしゃったので、たくさんいた弟子たちも、慎んでいました。たびたびこのようで、ある時、消えるようにいなくなりなさった。（弟子たちは空也上

人を）思いつく限りを探したが、まったく見つけ出せずに、数か月になった。そうばかりもしていられない〔＝空也上人を探し続けてもいられない〕ので、（弟子たちは）みな思い思いに散り散りになった。

問3　上達部や、殿上人などに対面する人は、決まっているようなので、作者は、いるかいないかさえ知られるはずもないが、十月一日頃のたいそう暗い夜、不断経を、声がよい僧たちが読むときであるといって、そちらに近い戸口に二人くらい出て聞きながら、雑談をして寄りかかって横になっていると、参上した人〔＝殿上人〕がいるので、「逃げて中に入って、部屋にいる女房たちを呼び出しなどするようなのも見苦しい。どうにでもなれ、ただその場に応じて。このようにただ（このままいよう）」と言う同僚の女房がいるので、（作者は）そばで（同僚の女房と殿上人が話すのを）聞いて座っていると、（殿上人は）思慮がある静かな様子でものなどを言うのが、残念ではないようだ。

（殿上人が）「もう一人〔＝作者のこと〕は」などと尋ねて、世間の普通の男性にありそうな軽く言い寄るそぶりを見せて口説いてもこず、世の中のしみじみとしたことなどを心を込めて言って、そうはいってもやはり厳重に引っ込みがたいいろいろがあって、私も同僚の女房も答えなどするのを、…

問4　こうして、山々や寺々を伝い行く間に、四月のはじめくらいに美濃の国まで上ってきたが、そうはいってもやはり思い捨てながらも、都のことなどを知りたいと思われて、「そちら〔＝都〕の便りがあればなあ」と心待ちにしているちょうどその時、ほととぎすが、二声三声鳴いて過ぎたので、

ほととぎす…＝ほととぎすよ、都へ行くならば言づけたい。（山を）越えるのが（お前よりも）遅れた旅のしみじみした思いを。

問5　人間の中にものがある。仮に名付けて風羅坊という。本当に薄い衣が風に破れやすいようなことをいうのであろうか。彼は、俳諧を長く好んだ。結局（俳諧を）生涯の仕事とする。ある時は飽きて投げ出そうということを思ったり、ある時は進んで人に勝つようなことを誇りにしたり、是非が心の中で闘って、このために身体が不安定である。一時は出世を願ったが、この（俳諧の）せいで支障があり、一時は学んで愚かさを悟るようなことも思ったが、これ〔＝俳諧〕のために破られて、とうとう無能無芸でただこの（俳諧）一筋につながる。

三

問1　（前内大臣の平宗盛が）「さて平維盛はどうした」と問いなさると、「平重盛の子供たちは誰一人お見えにならない」と申し上げる。「それ（＝平重盛の子供たちが誰一人姿を見せないこと）もそう（＝当然）であろう」と言って、いよいよ心細そうに思いなさった。

問2　そして、川沿いに少し西に行って、丹治という所から吉野山の入口にかかる。やや深く入って行って、杉群の中に、四手掛の明神と申し上げる神がいらっしゃるのは、「（『延喜式』に載る）吉野山口神社」などではないだろうか。だけど、そう（＝『延喜式』に載る吉野山口神社）いうほどの（由緒ある）神社にも見えない。

問3　五条あたりに、たいそう貧しくて住んでいた男女がいた。男はとても酒を好んだが、手に入れられるすべもなかったので、妻はひどく仕方がないと思って、自分の髪の毛半分くらいを切って市場に持って行き、酒に交換して男に勧めた。男は驚き、どのようにして求めなさったのかと尋ねると、このようにした（＝自分の髪の毛を切って市場に持って行き、酒と交換した）と語ったので、男はしきりに泣いて、…

問4　今すぐにでも出奔してしまいたい気持ちがして、そっと部屋の隅の戸を開けたところ、〈中略〉人に見つけられるだろうかとどこか恐ろしいので、もとのように入って横になったけれど、傍にいる同僚の女房は身体を動かすことさえもしない。以前も警固の役人が深夜に門を開けて出ていく習慣であったので、その時を（私が）ひそかに待っていると、今夜は早く開けて出て行った音がするので（私は出奔した）。

問5　頃は二月十日の明け方なので、立春後の寒さは、以前として尽きず、音羽川の流れも凍って、嶺の嵐もとてもはげしい。道の氷も解けない上に、さらに曇って雪が降るので、行くべき方向も見えなかった。子供が、しばらくは母に促されて歩くけど、しまいには足が腫れて血が出て、ある時は倒れ伏して、ある時は雪の上に座って、「寒いよ冷たいよ、これ（＝雪の上にいて、寒くて冷たいこと）はどうしよう」と泣いて悲しむ。母が一人で、これ（＝子供が足を怪我して、倒れ伏して泣きながら訴える姿）を見たとかいう心の中は、何とも言いようがない。